

☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
 ☆幅広いネットワークを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
 ☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット NEWS LETTER

第9号 1997年8月18日(月)

発行 歴史資料ネットワーク(神大文学部内)
 TEL078-881-1212(内線4079), FAX803-0486

目次	
1996年度活動実績報告.....	1
科学研究スタート/神戸市域の史料の仮整理すむ.....	2
古書市場問題統報/震災資料保存問題.....	3
被災地の遺跡を考える見学会.....	4
兵庫・須磨歴史ウォーキング/西淀川での取り組み...	6
史料ネットに寄せられた声から・白木沢旭児氏	7
/文献情報	7
"News Letter" 郵送購読受付のお知らせ、ほか	8

震災への緊急対応から継続的活動に向けて、①震災処理の継続、②被災地の歴史・文化を守る、③普遍的課題に向けて、という3つの課題を掲げ、史料ネットを改組してから、はや1年半近くが経過しました。この間も、被災地はじめ全国の歴史研究者や関係者、歴史愛好家の皆様のご支援により、活動を前進させていくことができました。あらためてお礼申し上げます。

本ニュースでも紹介しているとおり、昨年度以来史料ネットが取り組んでいる諸課題はいずれも継続進行中であり、より一層の取り組みが求められています。さらに今年度は、被災史料保全活動に関連する科学研究(詳細は2ページ参照)が始まります。この科学研究とも連携しながら、史料ネットの活動記録をまとめ、経験と教訓を総括した報告書作成に取り組んでいく予定です。引き続き、皆様のご支援・ご協力をお願いいたします。

1996年度活動実績報告

■史料保全活動実績

	1996年度中	1995年度・1996年度合計
史料救出・保全	7件 41人(うち史料ネット35人)	40件 494人(うち史料ネット323人)
パトロール調査		5市域 37回 326人(自治体職員若干名含む)
史料整理作業	4件 36日間 162人(自治体職員等含む)	11件 81日間 388人(全史料保有者、自治体職員等含む)

■市民講座・研究会等の開催

市民講座 第4回～第6回(宝塚、伊丹、尼崎) 参加者計590人
 日本史研究会大会特設部会 1996年11月23日 於立命館大学 参加者200人
 研究会「阪神・淡路大震災と歴史学 パート2」1997年2月16日 於エルおおさか 参加者38人
 第2回「震災記録の保存と編纂に関する研究会」1996年10月13日 於神戸大学文学部 参加者25人
 埋蔵文化財問題 緊急報告会1回(11人参加)、見学会4回(計52人参加)
 石造美術品調査・ウォーキング 2回(計28人参加)
 (ほかに他団体企画への後援・協力など＝大阪歴史学会見学検討会、門戸の歴史を知ろう展ほか)

■財政報告

全国の皆様のご支援により活動を継続することができました。決算概要は次のとおりです。

1996年度決算(1996年4月～1997年3月)			
歳入 2,819,033円	募金 2,156,383円	記録集販売 547,950円	ニュースレター郵送料等 114,700円
歳出 2,119,986円	通信費 446,000円	備品・消耗品 164,858円	ボランティア作業経費 292,004円
	常駐員経費 1,164,751円	その他経費 52,373円	

- ◇ニュース第5号でお願いした募金等の目標額計170万円を大きく上回るご協力をいただきました。
- ◆上記の歳出額以外に、史料ネット関連の研究活動について研究助成約160万円を得ました。
- ◇この結果、1995・1996年度合計で歳入12,526,607円、歳出11,470,355円となり、差引1,056,252円を1997年度に繰り越します。さらに1997年度は、活動総括・報告書作成等の研究活動について前記科学研究と連携して実施していきます。
- ◆しかしながら、長期的な活動の継続を考えた場合、財政面では引き続き困難が続いています。活動の趣旨をご理解いただき、ご支援をいただければ幸いです。

史料ネット活動支援募金 (郵便振替)
 名義 阪神大震災対策歴史学会連絡会 口座番号 01090-7-23009

被災史料保全活動関連の 科学研究スタート

神戸大学文学部の鈴木正幸氏を研究代表者とする科学研究「被災史料保全活動からみた都市社会の歴史意識に関する研究」（基礎研究B）が審査を通過しました。助成額は880万円です。被災史料の保全活動に携わってきた研究者、および都市形成史を研究対象にしている研究者が、1997年度から3か年計画で共同研究を行い、報告書としてまとめることになりました。テーマはおおむね以下の通りです。

- ① 震災後の史料保全活動の分析を通じて、現代社会における史料保全のあり方を考える。
- ② 都市部を中心に起こった今回の震災そのものを、歴史事象としていかに記録するかという方法論に関する研究。
- ③ 被災地の具体的な歴史と、そこにおける市民の歴史意識との関係についての研究。

そのための基礎作業として、まず史料保全活動の実際を把握するため、基礎的なデータの収集整理を行います。また保全された史料の多角的な分析を行うため、史料の仮整理も予定しています。

史料ネットとしては保全活動に関連する諸資料を提供するだけでなく、研究活動の面でも積極的に協力することになりました。科研グループからの要請もあり、史料ネット運営委員会のメンバーによる報告も行われています。

研究代表者以外の研究分担者は以下のとおりです。高橋昌明（神戸大学文学部）・持田ひろみ（神戸大学国際文化学部）・奥村弘（神戸大学文学部）・坂江渉（神戸大学文学部）・西谷地晴美（奈良女子大学文学部）・芝村篤樹（桃山学院大学経済学部）・今井修平（神戸女子大学文学部）・小田康徳（大阪電気通信大学工学部）・塚田孝（大阪市立大学文学部）・小路田泰直（奈良女子大学文学部）・馬場義弘（滋賀大学教育学部）・今津勝紀（樟蔭女子短期大学）・中川すがね（甲子園大学人間文化学部）。

なお、第1回の研究組織会議は6月1日（日）に神戸大学文学部で、第2回は7月5日（土）に六甲道の勤労市民センターで開かれました。

（文責・馬場義弘）

神戸市域の史料の仮整理すすむ

自治体の史料整理および保存公開機能が十分でなく、しかも被災地で最大の都市である神戸市域の被災史料の多くは、現在神戸大学文学部に仮保管されています。史料ネットは、このような状況のなかで、保全史料群の保存と概要調査のため、ボランティアとして史料の仮整理を行っています。

これまで、東灘区の昭和期の区画整理事業の実施過程が詳細にわかる藤本博氏所蔵文書について、その仮整理が二週間に一度、4～5人のボランティアによって進められています。

さらに、さる7月15日、もっとも状態の悪い東灘区御影の山本豊氏所蔵文書の仮整理をはじめました。この文書は、山本家の解体の際、二重壁の間から出てきたものです。山本氏がこの家を所有する以前の所有者である中松徳衛門商会の文書で、湿気と鼠害・虫害にさらされており、保管状態はきわめて悪いものでした。

この日の仮整理は、ネットのボランティア6

名で文書総量の半分を虫干し、分離可能なものを一点ごとに整理するという作業を行いました。このような過程から、この文書群が酒造と関連して重要な意味をもった酒樽製造業者の明治から昭和にかけてのまとまった史料群であることがおぼろげに見えてきました。この文書については、夏休みを利用して今後も仮整理を継続的に行う予定です。

また8月3日から5日、神戸大学日本史教室の古文書合宿の際、長浜万蔵氏所有文書の仮整理を行いました。この文書は、史料ネットの東灘での活動のなかでその存在をつかむことができたもので、今年の春に保全したものです。

今回の仮整理では、この史料の近世分、段ボール箱で5箱ある全体のほぼ3分の1の調査を終えました。その中で文書の内容が、脇浜村（現灘区）の近世の村文書と近代の都市部の財産区や魚市場経営・政治関係からなることがわかってきました。

今後も、保全史料の仮整理を進めるとともに、整理しつつある史料についての情報をお知らせしていきたいと考えています。仮整理に参加し

てもいいという方は、ぜひセンターまでお知らせください。
(文責・奥村 弘)

古書市場問題続報

前回のニュースレターで震災後の古書市場の動向に関して調査中であることをお知らせしましたが、その後被災地の史料保存機関のご協力を得てアンケート調査を実施しました。その結果報告をかねて情報懇談会を行いました。

アンケートでは、震災後古書市場に約30件の被災地の史料が姿を見せており、そのうち少なからぬ数が被災史料であること、それらの大部分は地域の史料保存機関が購入しているが、購入先が不明な文書もあること、古文書を扱う業者(古本屋)はほぼ固定されているものの、阪神地域だけでなく東京や九州の古書店が被災地の史料を扱っている場合もあること、などが明らかになりました。また、市場に出る過程で「選別」されたり、極端に高額な値段がつけられているケースも明らかになりました。

この調査の過程で、被災地の史料保存機関同士が古書市場の問題に関して情報交換を行う必要があるとの声が、多く寄せられたことから、アンケートに協力していただいた機関を中心に情報懇談会を開催しました(「阪神大震災後の古書市場に関するアンケート調査結果報告並びに懇談会」1997年7月24日、於神戸大学文学部、主催:史料ネット、協力:兵庫県立歴史博物館、被災地の5自治体機関の職員が参加)。

懇談会では、古書業界の実態に関する情報交換を行ったほか、市場に出た史料やそれを購入した機関について情報を早急に共有することのできるネットワークが必要であること、古書業界に対し「選別」をやめ適正な価格で取り引きするよう求める必要があること、歴史資料が金銭的価値のみで評価されること(「お宝ブーム」など)に対して史料価値の存在をアピールし世論喚起をする必要があることなどが話し合われました。また、古書市場の問題にとどまらず、近代の県布達などの広域的な地域にかかわる基礎史料の情報を共有するネットワークをどのように構築すべきか、など今後の歴史学研究のあり方にもかかわる議論を行うことができたのではないかと考えています。

震災関連の文書は、しばらく「寝かされた」後市場に出てくだろうという意見もあります。今回の調査で得られたネットワークを保持しつつ、この問題については今後も取り組んでゆきたいと考えています。

また、震災後の古書市場の問題は、史料保存を行う上で「日常的」に直面している問題が極端な形で噴出したものだともいえます。各地での取り組みについても情報を収集してゆきたいと考えています。
(文責・寺田匡宏)

震災資料保存問題

本ニュース第8号で、兵庫県の外郭団体である21世紀ひょうご創造協会による資料収集の取り組みや、西宮市の震災記録が1996年11月に発行されたことなどを紹介しました。その後、大阪府、宝塚市、21世紀ひょうご創造協会、公害地域再生センター(西淀川)などから震災記録誌が発行されました(これらについては、本ニュース末尾の参考文献欄をご参照ください)。また、21世紀ひょうご創造協会をはじめ、市民・ボランティア団体や公共図書館・史料保存機関、大学等の研究機関など、さまざまな機関・団体による資料調査・収集の取り組みが進められています。

しかしながら、前回のニュースで指摘した問題点、すなわちこれらの動きが全体として連携し、震災の資料の網羅的・組織的な保存と記録化を進めることが必要であるという課題は、あいかわらず解決されていません。

こうしたなか、地元NGO文化情報部の活動を引き継ぎ、早くから震災資料保存に取り組んできた震災記録情報センターが、残念ながらこの7月末をもって、活動を終了することになりました。センターで収集した資料は、神戸大学付属図書館などに引き継がれ保存される予定とのことです。

一方、21世紀ひょうご創造協会は、マスコミ

各社の協力も得ながら「阪神・淡路大震災映像アーカイブ」事業に取り組み、そのモデル映像データベースを1998年1月末まで同協会と阪神・淡路大震災復興支援館（フェニックスプラザ）で公開する予定です。さらに、同協会では避難所を中心に資料の調査・収集や聞き取り調査などを進めており、資料の所在に関するさまざまな情報や、調査先からの積極的な反応などの成果もあがっている反面、嘱託3名の調査体制ではいかんともしがたい状況とのことです。また、さまざまな分野からの「調査公害」と言われるほどの被災地調査が行われたにもかかわらず、これらの成果を共通の土台で集約保存していく取り組みがきわめて不十分にしかなされていないなど、多くの課題が浮かび上がってきていま

す。

史料ネットとしては、こういった状況を改善する意味も含めて、前回ニュースでは第3回「震災記録の保存と編さんに関する研究会」の開催を検討中としていましたが、具体化には至っていません。行政や市民団体などとも協力しながら、具体的な震災資料保存の取り組みを進めたいと考えています。各方面の皆さんのご協力をお願いします。

なお、この課題について全体的に問題点を整理した、佐々木和子氏（21世紀ひょうご創造協会嘱託）による報告が、全史料協会誌『記録と史料』第8号（1997年10月発行予定）に掲載される予定です。（文責・辻川 敦）

被災地の遺跡を考える見学会

第6回、第7回の「被災地の遺跡を考える見学会」について報告します。

第6回の見学会は、神戸市兵庫区の「上沢遺跡」を対象に、6月3日（火）に行われました。当日は雨まじりの天候でしたが、22名の参加者を得ました。遺跡は、弥生時代から鎌倉時代にまで続く、集落跡でした。見学会には「上沢遺跡」近隣の住民の方々も数名参加されていましたが、その方々の話によれば、この遺跡のあたりの海拔は、周囲からは一段高く、阪神大洪水の際にも被災を免れたとのこと。このことは、現に遺跡に立ち周囲を見渡せばすぐに了解できるものでした。さらに、発掘担当の調査員の方からは、周囲の低地では、遺跡・遺物の発見も見られないとの教示がありました。「上沢遺跡」周辺地域は、まさに住居区域として古来から好条件を備えていたということなのでしょう。今回の発掘調査は、被災地における道路拡張および区画整理にともなうものという、当見学会でははじめてのケースでした。その場合、いわゆる住宅地の「減歩」が問題になってくるのですが、調査員の方の話によるかぎり、地域住民社会との間で、この問題をめぐるやりとりはまだ起こっていないということでした。

第7回は、これも神戸市兵庫区の「兵庫津」遺跡を対象に、7月9日に行われ、40数名の参加者がありました。「兵庫津」遺跡は、以前にも「見学会」で訪れたことがあるのですが、今

回も、前回同様、国道2号線沿いの共同溝敷設工事にともなう調査発掘でした。今回の現場では、中世前期の遺跡と遺物の出土があり、そのうち、遺構（公的施設かとも考えられる建物の石組み）については、残念ながら国道沿いという現場の特殊性および工期との関連で見学することはできませんでしたが（交通網の円滑な機能維持のため、調査が終わった部分については即鉄板をかぶせ、簡易車道として使用）、陶磁器（日用品が主）をはじめとする遺物は見ることができました。今回の見学会では、文献史の側から、中世～近世の兵庫津の展開をとりまとめた解説を史料ネットの側で準備したのですが（担当は中世史専攻の神戸大院生）、その内容と、現場の調査員の方からの遺物の出土状況についての説明との間に、相互補完的な一定の対応関係（史料から推定された兵庫津の発展・衰退と、出土遺物の量・出土区域についての時期的な展開の様相との関係など）があったのが印象的でした。また、「兵庫津」についての歴史的認識・理解の深まりが、より立体的になることをねらって、発掘現場の見学を終えた後、周囲の「兵庫津」関連史跡を見て歩く「ウォーキング」も組み合わせました。

（文責・井上勝博）

第7回「被災地の遺跡を考 える見学会」に参加して

7月9日に行われた「兵庫津」遺跡見学会の参加者から寄せられた感想文をご紹介します。

■高野知子さん（甲南大学文学部3回生）

今回私は、第7回の「見学会」に参加させていただき、「兵庫津遺跡」の遺跡・遺物の見学と、「兵庫津遺跡」周辺の史跡の見学をしました。このような見学会に参加したのは今回が初めてで、行く前は少し戸惑っていたのですが、実際に遺跡発掘現場に行ってみると（基本的に、モノをみるのが好きなのもあって）けっこう楽しくいろいろなモノに触れることができました。

遺跡の方は、発掘の進行状態と私の知識のなさにより、あまりよくわからなかったのですが（車の音で、解説してくださっているのも聞き取りにくかったのです）、遺物の方は、思っていたよりも沢山あって、実際に手にとってみることもでき、満足できました。周辺の史跡見学も、兵庫県に住んでいながら、あまり知らなかったところなどを知ることができ、解説もして下さってわかりやすく、楽しかったです。

私自身、日本史は好きなのですが、大学では社会学を専攻しているため、遺跡などに触れる機会が、展示会などがなければ、ほとんどありませんでした。だから今回参加できたことは、本当に貴重な機会だったと思います。自分が住んでいるところの歴史も知らないというのになにか寂しい気がします。私のように、日頃歴史に触れない人間でも、このように見学会などがあれば、自分の住んでいるところの歴史に触れることができる、良い機会になると思います。多くの人にこのような機会があることをどんどん知らせて欲しいと思います。

■上中かおりさん（甲南大学文学部3回生）

今回初めて参加させて頂きました。今まで登呂遺跡しか行ったことがなく、遺跡とは広くて公園のようにになっているものだと勝手に思いこんでいた私にとって、普段車が沢山通っている所に遺跡があるのはとても不思議なことでした。

それから、出土品はやはり多くのものが壊れていましたが、中には少ししか欠けていないものや、つやが失われていないものや、最近つく

られたものと間違いそうなものも結構あったことも驚きました。出土品はいろいろな地方のものがあったようですが、後で、丹波地方の焼き物が発掘されたけれども、それは今までの常識からすると考えられないことで、何か発見があるかもしれないという話を聞いて、そういう遺跡が近くにあり、実際に出土品を手にとってみられたことは嬉しいことだと思いました。

今回は授業の都合もあり、途中からしか参加できませんでしたが、現場の方々も丁寧に説明して下さい、発掘現場の雰囲気も感じることで、勉強になりました。

■山根政彦さん（甲南大学4回生）

私は正直言って、「教科書に書かれている歴史」にあまり興味が持てなかった。教科書に書いてある歴史は、いかにも、ここに記述していることが「スタンダード」なんだということを強調してくるように思えるからだ。だから、高校時代には一度、「教科書」の中の歴史アレルギーに陥った私である。でも、幼い頃から、弥生時代の人々が残してくれた大中遺跡が身近にあることで、遺跡や歴史的建造物から昔の人々の生活に思いを馳せることは好きであった。

今回の遺跡見学会も、このような動機から参加した次第である。私にとっては、開発され尽くしたかのように見える港町神戸の地下に、兵庫津遺跡のような立派な遺構が残っていることに、改めて驚きを感じた。特に、土器や磁器の破片の多さと多彩さに、それを見ているだけでも楽しかったが、備前焼から中国製の磁器まで出土しているということは、いかに兵庫（神戸）の港が、外に向かって開かれていたかということを実感できた。教科書で知った知識を得る感覚とは全く異なる、「自分の肌で感じる身近な神戸の港町」を実感できたように思える。

発掘に携わる人の説明を聞きながら、「あの人の説明では、手で薄くのびした土器が京都から持ち込まれたと言っているが、底を糸で切った土器の方が高級感あふれているように見える。だから後者の土器の方が都のある京都から持ち込まれたのではないか」という疑問を今でも拭き去ることができない。こんな疑問に対して、多様な解釈の可能性があることを実際に専門家から聞ける機会は、そう多くない。

私は歴史学専攻ではないので、兵庫の港に関する専門的知識はそんなに持ち合わせていない。

でも、遺跡を直に見ながら、歴史と触れあって想像力をふくらます、こんな歴史の楽しみ方も

あっていいんじゃないかと考えている。

兵庫・須磨歴史ウォーキング

大輪田泊、福原京、一ノ谷など平家と関係の深い神戸。住民は「平家びいき」と言われ、街のあちこちに平家にかかわる史跡や伝承が残っている。しかし最近、そんな「地域の記憶」がどんどん薄れていき、今度の震災でさらに拍車がかかるのではと危惧されている。若い人たちの間では、清盛塚などの史跡自体の存在を知らない人も多い。また平家伝承がいつ頃どのように生まれてきたか、かつての災害のなかで史跡がどのように維持されてきたかなど、歴史的に重要な問題も実はほとんど解明されていない。

まずは自分たちの目で史跡の現状を確認しようということで、さる5月10日（土）、ウォーキングが実施された。薫風かおる晴天のもと、参加者は学生を中心に市民・研究者など総勢30名余り。集合した高速神戸駅から山手にのぼり、荒田・平野・祇園と平家一門の別荘が立ち並んでいた往時の「高級リゾート」を巡った。庭池跡や貿易陶磁が出土した地点の背後、高台にある祇園神社に立つと、眼下の地形が、当時の宮廷社会で流行していた風水説の理想に近いことが判り、参加者を感じさせた。

そこから一気に下って兵庫津へいき、真光寺（一遍の墓所）、清盛塚の周辺を歩く。この辺りは神戸大空襲の被害が最もひどかった場所の一つ。かつては白かった花崗岩の一遍の墓（五輪塔）や清盛塚（十三層石塔）が、現在の黒色になったのも、空襲でたちこめた油煙のせいである。所どころ黒色がはげているのは、今回の震災で倒壊した時についた傷だが、よく観察するとかなり以前に（慶長の大地震？）欠けた跡もある。まさに数百年間の歴史が年輪のように刻まれている、貴重な地域遺産であることを再確認した。

その後、山電月見山駅から旧西国街道を須磨寺まで歩く。かつての街道筋はふいふい景観の残る街だったが、今は更地やプレハブだらけで、2年半近くたってもまざまざと残る震災の爪痕が、一行を無口にさせた。須磨寺には青葉の笛をはじめ、かつての参詣者が目を輝かせて拝観した平家伝承にかかわる遺物が多い。それらが、ややさびれた宝物館に寂しげに並んでいるのを、少し複雑な気分で眺めた後、須磨の関の故地に立ち寄って、さらに海岸で解散した。

（文責・藤田明良）

西淀川での取り組み

かつて激甚な公害を経験し、先の阪神・淡路大震災においても多くの被害をだした大阪市西淀川区では、昨年、西淀川大気汚染訴訟の和解金の一部で、あおぞら財団（公害地域再生センター）が設立され、地域再生のまちづくりが行われている。史料ネットでも地域の歴史や文化を生かしたこの取り組みに協力している。これらの動きについては、本ニュース6号・7号でも一部紹介したが、今回はこの間の取り組みの実施結果について報告する。

<西淀川の震災展>

1997年1月17日から19日まで、西淀川区のエルモ西淀川において「西淀川の震災展」が行われた。主催の「西淀川の震災展」を成功させる実行委員会は、あおぞら財団をはじめとする区内の住民によって組織された。震災展期間中は約900人が来場、関連行事にものべ

約70人が参加した。

震災展終了後、この取り組みを記録に残そうと、同委員会は新たに震災展記録集発行委員会を結成。6月には『小さな街の大きな被害―西淀川の震災展』の記録集を発行した。なお、この記録集は一部300円（残部僅少）。お問い合わせは、あおぞら財団（TEL. 06-475-8885）まで。

<大阪歴史学会見学検討会>

1997年3月16日、大阪歴史学会とあおぞら財団（公害地域再生センター）の共催、史料ネットの後援で、大阪歴史学会1996年度見学検討会「西淀川を考える―大都市近郊の歴史的変貌―」が行われ、約60人が参加した。午前中は西淀川区内の現地見学、午後は、エルモ西淀川において検討会を行った。

午後の検討会では、渡辺忠司（大阪市史編

纂所)、服部敬氏(花園大学)、小田康德氏(大阪電気通信大学)らが、近世から近代にかけて、西淀川区が農村から都市へ変貌していく歴史的過程を報告。続いて塚口アキエさん・北村ヨシエさん(西淀川公害患者と家族の会)、津留崎直美氏(西淀川公害訴訟弁護

団)らが公害の経験や裁判について報告した。西淀川では、今後も住民による地域再生の取り組みが続く。これに対して、史料ネットをはじめとする歴史学の側からの継続的な連携・協力が求められていると言えよう。

(文責・片岡法子)

— φ — φ — φ — φ — φ — φ — φ — φ —

■史料ネットに寄せられた声から...

☆前回の第8号に引き続き、史料ネットに寄せられたご意見をご紹介します。

★今後も、史料ネットの活動に関するご意見・感想を募集します。投稿原稿をお寄せください。

日本史研究会大会特設部会の感想 しらきさわあさひこ 白木沢旭児(北海道大学文学部)

史料ネットの活動と歴史学に対するいくつかの問題提起について私見を述べることにしたい。

歴史研究者と市民との間に「史料」に対する大きな認識のギャップがあることが指摘された。またそれを埋める方策として「現地説明会」、市民とのネットワークの強化、さらには現地利用主義が提唱された。私は現在、新札幌市史編集員として戦後編の編さんに直面しているので、興味深く聞くことができた。戦後編では執筆者の大幅な補強、さまざまな規模の聞き取り調査の実施、期限による破棄を待つ膨大な市資料保存センター所蔵行政文書の利用・保存など課せられた課題は多く、史料ネットの経験をふまえた、市民に根ざした史料保存・利用という問題提起は、一つの明確な方向性を示したものとして学ぶところが大きかった。

ただ、問題は市史編さんという必要に迫られて初めて地域社会と史料の問題が生じてくるのであって、歴史研究自体が地域史料を必要としているわけでは必ずしもない、ということである。大会時の討論でも報告者と質問者がかみ合わないと感じたのはこのためである。また、歴史学それ自体が市民の歴史認識とは離れて成り立っており、たまたま歴史研究者が史料として

認定したものが保存・利用の対象となる現在の状況は、現代史ではますます顕著になるだろう。

したがって、史料ネットの経験を普遍化するためには、それぞれの地域に地域史料を用いて地域史研究を日常的に行う主体が存在しなければならない。その主体は地元在住の歴史研究者(外国史や日本古代史専攻者なども含めた)なのだろうか。あるいはその地域に研究対象として興味を持つ(＝フィールドとしている)遠隔地の歴史研究者なのだろうか。役所の自治体史編さんの部署あるいは公文書館・文書館職員なのだろうか。阪神地域ではここにあげたうち遠隔地の研究者を除いた人々が主たる担い手となっているようである。しかし、他の地域ではそれぞれの立場から地域史料の必要性をばらばらに認識しているのが現状であり、地域史料を探求する主体がそもそも存在しないのではないだろうか。

今後、ぜひ知りたいことは、阪神地域におけるネットワークの核となった主体がなぜ形成されたか、ということである。震災というパニックの経験とさまざまなボランティア活動の刺激が決定的なのか、あるいは自治体史、地元在住歴史研究者などのこれまでの仕事の蓄積があったのか、ということである。私は、やはり地域史研究の蓄積の多さが決定的だったのではないかと考えている。とにかく地元を顧みながら考えさせられることが多かった大会であった。

— φ — φ — φ — φ — φ — φ — φ — φ —

■文 南大 青 幸 辰

大阪府 『平成7年1月17日 阪神・淡路大震災の記録』 1997年1月

東京国立文化財研究所 『美術工芸品の防災に関する調査研究』 1997年3月

(前号で紹介した文書等所蔵施設被害調査報告を収録した、文化庁による科学研究の報告書)

- 宝塚市 『阪神・淡路大震災—宝塚市の記録1995—』 1997年3月
- 21世紀ひょうご創造協会 『阪神・淡路大震災関連収集資料目録 平成9年3月』 1997年3月
- 同上 『阪神・淡路大震災復興誌』第1巻 1997年3月
(史料ネットをはじめとする被災史料・文化財保全活動や、埋文関係救援連絡会議の取り組み、さらには震災資料保存・記録編さん問題についても詳述している)
- 公害地域再生センター(おおぞら財団) 『小さな街の大きな被害「西淀川の震災展」の記録』 1997年6月
- 『日本史研究』416号(1997年4月) 1996年度日本史研究会大会個別報告特集号
(特設部会「阪神淡路大震災と歴史学」の3報告を掲載)
- 『日本史研究』417号(1997年5月) 1996年度日本史研究会大会報告批判
- 歴史資料ネットワーク(奥村弘、川口宏海、今井美紀、芝村篤樹)
- 震災復興 歴史と文化を考える市民講座 第5回
- 亀田 浩 阪神・淡路大震災被災資料の調査と収集
- 麻田 茂 あれから二年
- 以上3編、いずれも『地域研究いたみ』26号(1997年3月、伊丹市立博物館)
- 荒木由起子 歴史と文化を考えるシンポジウム—市民とともにつくる新「尼崎市史」—に参加して
『ヒストリア』154号(1997年3月)
- 田良島哲 阪神・淡路大震災における文化財等の救援活動
『埼玉県地域史料保存活用連絡協議会会報』23号(1997年3月)
- 古本由佳 史料ネット市民講座 開催報告 『歴史学研究月報』449号(1997年5月)
(第6回 尼崎講座の報告)
- 松下佐知子 「史料ネット」のこの一年を振り返って
『神戸大学史学年報』12号(1997年5月、神戸大学史学研究会)
- 木下光生 「阪神淡路大震災と歴史学 パートⅠ・Ⅱ」参加記
- 白石健二 西淀川の震災展、西淀川地域資料室を見学して
以上2編、いずれも『地方史研究』47-3号(267)(1997年6月)
- 山本幸俊 日本史研究会特設部会「阪神淡路大震災と歴史学—被災史料保全活動から見えたこと—」参加記 『新潟史学』38号(1997年6月)
- 坂本 勇 災害と人文・歴史系専門家の役割 『歴史評論』567号(1997年7月)

■パソコン通信・インターネット関連情報

- ◇Nifty-Serve歴史フォーラム本館14番会議室【地域の歴史と文化財】の世話役・ぶんいちさんおよび、西村美紀子さん(全史料協会、震災記録を残すライブラリアン・ネットワーク)のご好意により、史料ネット紹介情報(本ニュース抜粋ほか)が同会議室にアップされています。
- ◆史料ネットのホームページをインターネット上に開設すべく準備中。まもなく開設予定です。

■“News Letter”郵送購読受付のお知らせ

- 1997年度の郵送購読申込みを受け付けます。ご希望の方は、送料500円を添えてお申し込み下さい。
- ◇振込口座 郵便振替 01090-7-23009 名義 阪神大震災対策歴史学会連絡会
- ◆募金口座と同じ口座ですので、かならず「“News Letter”郵送購読希望」と明記してください。
募金と同時に振り込まれる場合は「“News Letter”郵送購読料含む」と明記してください。

史料ネット NEWS LETTER No. 9	1997.8.18 (月)
編集・発行 歴史資料ネットワーク 〒657 神戸市灘区六甲台町1-1	
神戸大学文学部内 TEL. 078-881-1212(内線4079)	
FAX. 078-803-0486 e-mail yfujita@lit.kobe-u.ac.jp	